



第4話 トリボンのゆめ

錦林小学校の図書館にすんでいるトリボンには、ふたつの夢があります。

ひとつ目は、カラーページをもつこと。

トリボンのからだは本でできていますが、文字ばっかりで、絵や写真がありません。もちろん、書かれていることばがおもしろければ、それでOKなのですが、

トリボンはときどき、じぶんのからだをパラパラめくりながら、

「ちょっとぴり、おしゃれしてみたいな。青ページや、水玉もようなんかで」

なんて思っています。

もうひとつの夢は、いつか、高い高い空を飛びまわること。

「雲にさわれるくらい、高い山の上を、大きな輪をかけて飛べたらなあ！」

けれども、トリボンは本ですから、ちょっとした風でかんたんに吹き飛ばされてしまします。そもそも、窓辺でグーグー昼寝していたのんきな鳥が、本にはさまってトリボンになったのです。そんな高いところまで舞いあがるなんて、ちょっとムリかもしれません。

ある日、3年生のクラスが、担任の先生といっしょに図書館にやってきました。

担任の山田先生はおんなのひとで、スポーツがとくいそうです。

「さあ、みんな、今日は図書館を、みんなの手で、もっとたのしくしましょう」と元気な声で、山田先生がいいました。トリボンは棚の上で、なんだろう、とわくわくしながらページをとじています。

「みんな、はさみを持ってきていますね。テーブルの上の画用紙で、この図書館の本にはさむ、シオリをつくりましょう」

山田先生のまわりに、こどもたちが集まります。みんな目をかがやかせながら、じょうずにはさみを使い、色画用紙を切って、細長いシオリをつくっていきます。

そうしてえんぴつで、それぞれのシオリに「とってもおもしろいよ」「スポーツ好きなあなたにおすすめです」「オバケってほんとうにいる、かも」などと書きこむと、棚の上の好きな本にはさみこんでいきました。山田先生のいうとおり、図書館はあっという間に、もっとたのしい場所になりました。

ところが、どうしたのでしょうか、「女の子がひとり、泣きそうな顔をしています。名札には、『おおたに ゆうこ』、と書いてあります。

「おおたにさん、どうしたの」と山田先生がききました。

「わたし、わたし、ぶきっちょで、はさみでまっすぐ、シオリのかたちに、紙が切れへんのん」

目をこすりながら、おおたにさんがいいました。

山田先生はやさしくほほえみ、「あのねえ、おおたにさん、シオリって、まっすぐなかたちやなくていいのよ。まっすぐ、細長いなんて、決まってへんのよ。好きな風に切ってごらん」

おおたにさんはしばらくテーブルの上を見つめていました。そして、真っ青な画用紙を手に取ると、はさみでザクザク、切っていました。クラスのともだちもみんな見ていています。

やがておおたにさんのシオリが完成しました。大きさは、たっぷり、本のページくらい。まわりはふわふわ、まるく波打ったかたち。ともだちの誰かが、「ゆうちゃん、それ、青い空の、雲みたいやね」

といいました。おおたにさんは照れくさそうに笑い、立ちあがると、もうしろの棚に置かれてあった本を一冊手にとり、まんなかあたりのページにそっとはさみました。

「あれえ、先生」

「どうしたの」

「この本、なんか今、勝手にパタパタ、ひらいたりとじたりしてたかも」

いっぺんにふたつの夢がかなってしまったトリボンは、うれしそうに羽ばたきするのを、いっしょにこらえていました。



せいかく としょかんかつようぶかい
(制作: 図書館活用部会)